

背景と目的

歩行者の死亡事故は減少傾向であるが、自動車事故に比べて減少割合が低く、近年の歩行中死者数は自動車乗車中より多い。また、平成23年における歩行中死者数のうち約3割は横断違反であり、これはほとんどが乱横断によるものと考えられる。乱横断の対策としては、中央分離帯の設置が有効である。しかしながら、設置の指針となる基準等はなく、その必要性、設置方法、設置による影響等が現場に任せられている状況となっている。

このような背景から、大都市において街路事業を合理的に推進するため、交通信号、横断抑止柵、横断歩道橋など交通安全施設の設置や撤去、運用方法の判断に役立つ客観的・科学的事実を体系的に整理することが必要である。

本研究は、その一環として、乱横断の実態把握、行動のモデル化、横断施策の評価と提案を行うものである。



方法

最初に実態調査に基づき、乱横断者の行動を明確化する。次に行動を説明するモデルを構築する。さらにモデルを活用したケーススタディを実施し、横断施策のあり方を提案する。

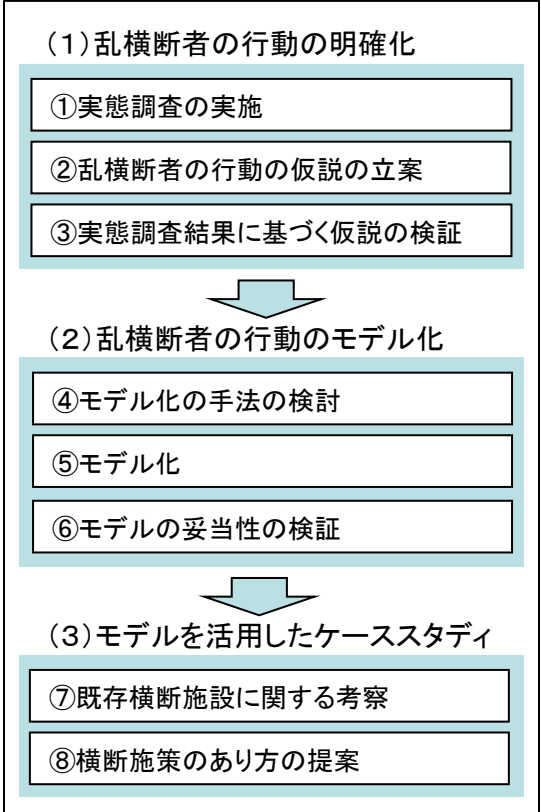
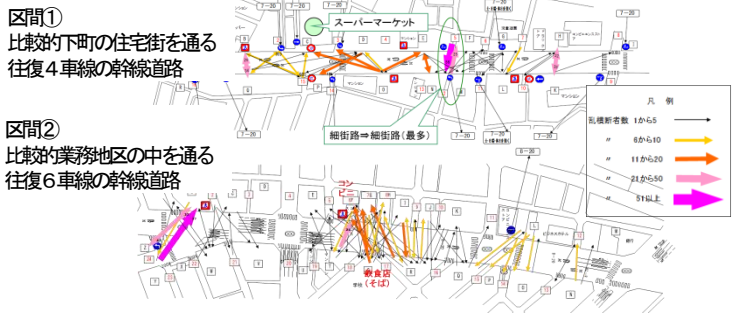
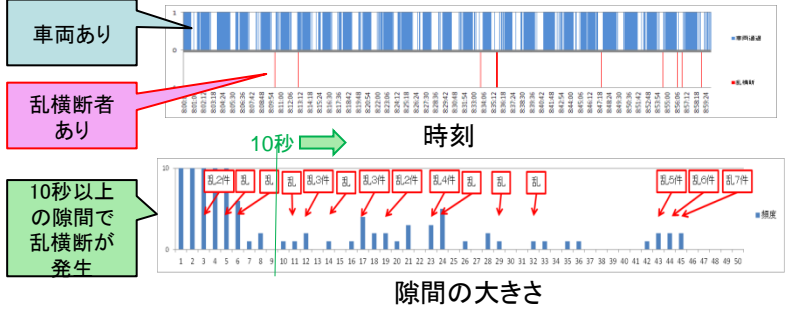


図 研究の手順

◆周辺環境が異なる2か所を対象にビデオ調査を実施し、実態を把握



◆都市部の信号交差点が近接する区間では「脈流」が発生 道路上に車両が存在しない「隙間」が発生 乱横断はその「隙間」を狙った行動



◆モデル化（現在実施中）

- ・「隙間」の状態を把握できれば、乱横断の安全性やリスクを評価できる可能性がある。
- ・道路交通状況（需要、交差点間隔、信号制御など）と「隙間」の関係を時間の関数で定式化し、定量化を図る。

今後の方針

- 下記の分析を実施中である。
- ・実態調査から把握した乱横断行動のモデル化：モデルの構築・実データによる検証
 - ・作成したモデルを活用したケーススタディの実施：既存横断施設に関する考察（評価と改善提案など）

連絡先